

演題12 外傷により頬脂肪体のヘルニア形成をきたした1症例

○小川 光一, 佐々木 正道, 松本 断  
関山 三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

今回我々は、外傷により頬脂肪体の口腔内へのヘルニア形成をきたした1例を経験したので報告した。

症例：1歳2カ月の男児で、初診は昭和54年1月15日。家族歴・既往歴は特記事項なし。主訴は右側頬粘膜部の腫瘍が気になる。現病歴は、同日午後7時頃、家の中で歯ブラシを口の中に入れて遊んでいたが、ゴザの端につまづき転倒し、歯ブラシが右側頬部に突き刺さり、同日午後8時急患として本学を受診した。

現症：全身所見は号泣し興奮気味。口腔外所見は右側頬部に軽度のびまん性腫脹が認められ、腫瘍を咬む為と思われる閉口障害を認めた。口腔内所見では、右側耳下腺乳頭部の遠心下部より拇指頭大棍棒状の形態の有茎性、表面は赤褐色・平滑・桑実状を呈し、弾性軟の

腫瘍が存在し、茎部にそって裂創を認め、 $\frac{D}{D}$ に一致した圧痕が腫瘍に認められた。臨床診断は右側頬粘膜部裂創および頬脂肪体の herniation であった。

処置および経過：患者は興奮状態であり、口腔内の精査や処置をする事は困難であったので、緊急手術として午後11時より全身麻酔下に口腔内の精査・頬脂肪体の復位・裂創縫合を実施した。ゾンデにより裂創内を探查すると創部の後上方に組織隙が触知され、容易に腫瘍は組織隙に復位された。術後一過性の頬部腫脹をきたしたが、4日目より急速に消退し、以後現在まで良好に経過した。

考察：頬脂肪体が外傷により口腔内に herniation をきたした症例は、1968年 Clawson らによる報告以後6例あり、本邦では何故か脂肪腫として2例が報告されていた。これら症例は年齢は5カ月より4歳で平均1歳10カ月、部位は右側7例、左側1例、受傷原因は転倒5例、転落2例などであった。原因物は玩具、スプーン、歯ブラシなどであった。処置は全身麻酔7例、局所麻酔1例、処置内容は脂肪体の切除5例、復位3例であり、受傷より1日以内に5例が処置を受けていた。